

# ページの半分から始まります。

中川雄一郎 著

『協同組合のコモン・センス——歴史と理念とアイデンティティ』

(日本経済評論社, 2018年)

富沢 賢治\*

## 1. 著者の紹介

著者の中川氏は、協同組合に関する研究書を多く書かれ、2002年から2年間、日本協同組合学会の会長も務めた方なので、いまさら研究者としての彼を紹介する必要はないであろう。彼は多くの協同組合人を育てた教育者でもある。2017年に明治大学を退職したが、そのさい彼が担当してきた協同組合学という講義をNPO論などに変えるという提案もなされたようである。しかし、断固として協同組合学の継続を主張する中川氏の影響力が強くあったゆえ

に(と私は信じるが、謙虚な中川氏自身は「そんなことはない」と否定する)、協同組合学は消滅することなく継続されることになった。大学から協同組合論が一つ一つ消えていく昨今、中川氏の貢献は大である。

## 2. 本書の紹介

本書は、講演録であり、つぎのように構成されている。

第1章「ロッチデール公正先駆者組合の遺産」  
先駆者組合の歴史は、その前史と発展史を含

めて、中川氏が長年取り組まれてきた研究テーマである。それだけに第1章の歴史叙述は氏の面目躍如という感がある。多くの史料を読み込んだ記述が読者を生き生きとした歴史のなかに引きずりこむ。先駆者組合の歴史的遺産についての氏の理論的整理も説得的である。本書全体で氏が主張したいことが、この第1章に集約されている。

氏の指摘する先駆者組合の歴史的教訓は多くあるが、とりわけ以下に引用するように、協同組合における教育と民主主義の問題が重視されている。

「先駆者組合は、教育を下敷きにしてはじめてイギリス市民社会に対して『新たな経済——社会的な形式と秩序』を支える協同組合の組織文化を創り出すのに成功したのです。現代の協同組合人は、教育に関わるこの『先駆者組合の遺産』をどのように再創造するのかが問われているのです。」

「アーノルド・トインビーが強調した言葉、『協同組合人の仕事は市民を教育することである』とのアプローチも協同組合教育に関する重要な視角である、と捉えています。」

協同組合の重要な社会的役割は、「多様な市民同士の間関係を築いていこうと努力することです」。「民主主義は普遍的な真理を達成しようとするのではない。そうではなく、民主主義は多様な市民同士の間関係を築いていこうと努力することなのである」(キース・フォークス著・中川雄一郎訳『シティズンシップ』日本経済評論社、2011年)という民主主義観が大切だ。

## 第2章「協同組合は何を求められているか——協同組合の理念とシティズンシップ」

本章において中川氏は、ICA(国際協同組合同盟)の歴史と協同組合原則の歴史を振り返る

ことによって、協同組合の社会的役割と社会的価値は何かという問題にアプローチしている。

問題へのアプローチにおいて氏に独自であるのは、シティズンシップという概念を導入することによって新しい協同組合像を創出しようと試みている点である。

氏によれば、協同組合員は、協同組合の自治の主体であり、組合員としての権利と責任を持ち、協同組合の運営に参加する。協同組合員は組合員活動を活発化することによって市民社会を活発化し、「安定した人間的な社会秩序」を創り出す活動に参加している。協同組合員にとって重要であるのは、自らが市民(シティズン)であると自覚することである。市民であるということ(シティズンシップ)は、自らが自治体の自治の主体であるという自覚を持ち、自治の主体としての権利と責任を持ち、自治に参加することである。つまり、協同組合員は市民としての責任を果たすことによって社会的責任を果たすことになる。そこに協同組合の社会的役割と社会的価値がある。

## 第3章「地域づくりと社会的企業——共生経済と社会的企業」

本章では、イギリスでの調査にもとづいて、共生経済の担い手である社会的企業がどのように地域コミュニティの活性化に貢献しているのか、その実態がヴィヴィッドに記述されている。

中川氏によれば、「共生経済」は、「地域コミュニティにおいて自治・権利・責任・参加・公正・民主主義に基づいて展開される人びと相互の、また非営利・協同組織相互の経済活動」であり、「『新たな経済——社会の形式と秩序』を創り出し、それを維持し、発展させていくヒューマン・ガバナンス(人間的な統治)に基礎を置く経済」である。「シティズンシップと民主主義」を共生経済の概念の中心に置くところに中川氏の特徴

がある。

中川氏は、とりわけ、共生経済の担い手としての協同組合のコミュニケーション機能を重視する。氏は、コミュニケーションに基礎を置くコミュニティは社会の「すべてに向けて解放されている対話的モデル」である、とするユルゲン・ハーバーマスの見解を受けて、「協同組合や社会的企業もまた対話的モデルに基礎を置く『コミュニケーション・コミュニティ』である」と位置付けている。

氏は、また、協同組合が「コミュニティのなかのコミュニティ」になるよう推奨する。氏が紹介する、イギリスの社会的企業のイニシアティブで設立された小学校のミッション・ステートメントには、「本校のガバナンス・ビジョンは、本校がコミュニティの中心的な存在、すなわち、コミュニティのなかのコミュニティになるよう努力することである」と書かれている。

#### 第4章Ⅰ「レイドロウ報告の想像力」

#### 第4章Ⅱ「協同組合は『未来の創造者』になれるか」

第4章の基本的なテーマは、将来に向けて協同組合は何を目的に何をなすべきかという実践的な課題である。この課題の意味を明確にするのが、第4章のⅠ「レイドロウ報告の想像力」であり、課題に答えるのがⅡ「協同組合は『未来の創造者』になれるか」である。

将来に向けての協同組合の課題として中川氏がとりわけ重視するのは、「政府やその他の公的機関から成る第1セクターと私的・資本主義的企業の第2セクターとに対して、協同組合セクターを中心とする非営利・協同事業体によって構成される『第3セクター』の「拮抗力」(countervailing force)を持続させるための『民衆の力』(people power)」の強化である。協同組合がこのような方向にむかって進むことを決

意した時に、「協同組合は『コミュニケーション・コミュニティ』としてその経済・社会的な潜在能力を醸成し、創り出す」ことができるとされる。

ここでも中川氏は、コミュニケーション・コミュニティとしての協同組合を強化する要素として「教育と学び合い」が重要であることを強調している。

#### 第5章「シティズンシップと非営利・協同」

氏によれば、協同組合は、市民が協同活動を通じて福祉を享受する権利を行使し、資源を公正に配分するための「社会の基本的枠組み」を維持、改善することに貢献している。協同組合は、このような社会的貢献をつうじて、シティズンシップのコアである「自治・権利・責任・参加」に基礎を置く人間的な統治のための諸条件を再生産する社会的役割を果たしている。

協同組合を含む非営利・協同組織は、シティズンシップを基礎とする組織であると同時に、シティズンシップを実質化していく機能と役割を内在させているのであるから、「私たちは、自らが関わる活動手段を通してシティズンシップを社会的に実質化していきながら、他方でシティズンシップが非営利・協同の活動を社会的に豊かにし、民主主義を生活世界において実質化していく、という相互作用を促していく責任がある。」

#### 3. コメント

「コモン・センス」と「シティズンシップ」は、本書を読み解くうえでの二つのキーワードである。

中川氏は、本書の出版意図をつぎのように述べている。「私は本書のタイトルを『協同組合のコモン・センス』とすることで、『協力・協同も協同組合も誰もが共有する意識対象であ

り、また健全でかつ实际的な判断力に基礎を置く対象である』ことを市井の人たちに伝えたいと考えた訳です。」

氏によれば、「コモン・センス」は、たんなる「常識」ではなく、common senseの語義通り、「だれもが共有する意識」であり、だれもが共有できるように「健全で实际的な判断力」となる意識である。

「コモン・センス」の意味合いに込めた氏の思いを私なりに付度すると下記のようになる。

コモン・センスの哲学的分析を試みた中村雄二郎氏は、「常識とは、私たちの間の共通の日常経験の上の立った知であるとともに、一定の社会や文化という共通の意味場のなかでの、わかりきったもの、自明になったものを含んだ知である」と述べたうえで、common senseを「共通感覚」と読み替えることによって「知」の組みかえを試みている(『共通感覚論——知の組みかえのために』(岩波書店、1979年)。中村氏は、「共通感覚とは、他のすべての人びとのことを顧慮し、他者の立場に自己を置く能力である」というカントの立言に注目しているが、この立言に関連して述べれば、『協同組合のコモン・センス』で中川氏が述べたかったことの重要なポイントは、「他のすべての人びとのことを顧慮し、他者の立場に自己を置く能力」を育む場として協同組合を捉えることが大切だということではなかろうか。

この点は、つぎのシティズンシップ論と関連してくる。

シティズンシップの観点から協同組合を論じるのは、中川氏独自の協同組合論である。

氏によれば、シティズンシップのコア概念は、「自治、権利、責任、参加」である。私見によれば、市民の自治も権利も責任も参加も、市民が「他のすべての人びとのことを顧慮し、他者の立場に自己を置く能力」を持つことによって

成り立つ。そして、その能力を育む場として協同組合が大きな役割を果たしうる。中川氏によれば、「市民の市民たる要諦」は「個々人が抱えている課題・問題を社会的な課題・問題として対応する」ことであるが、協同組合はこのような市民を育てている。

協同組合は「民主主義の学校」と呼ばれてきたが、中川氏の目からすれば、「シティズンシップの学校」と呼ばれてもよいのではなかろうか。彼が翻訳した『シティズンシップ』の著者フォークスも、「協同の社会」では「互惠主義や平等といったシティズンシップの積極的な価値の多くが存在する」と述べている(フォークス、前掲書、111ページ)。

#### 4. 翻訳

ロッチデール公正先駆者組合の支援者として有名なG.J.Holyoakeは、日本では従来「ホリヨーク」と称されてきた。中川氏も本書でその伝統に従っている。しかし、大塚高信ほか編『固有名詞英語発音辞典』(三省堂、1969年)によれば、Holyoakeは(hóuliouk)と発音される。ただし、名前のスプリングからaが除かれたHolyokeは、イギリスでは同じ(hóuliouk)だが、アメリカ合衆国では(hóuljouk)と発音されることがある、となっている。念のため何人かのイギリス人に聞いたところ、Holyoakeは(hóuliouk)と発音されるという返答であった。意味としても、Holyoakeは、holy oak「聖なるオーク」に由来するかもしれないが、「聖なるくびき(yoke)」でないことは確かであろう。したがって、これからHolyoakeについて書くときは、「ホウリーオウク」としないまでも、せめて「ホーリーオーク」としたらどうであろうか。

\* 協同総合研究所